神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	ほしいもの
著者	赤星直忠
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告　第 4 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1971 年（昭和 46 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

ほしいもの

Things desired as historical records of the museum

赤星直忠

Naotada Akahoshi

神奈川県立博物館は，神奈川県という一つの地方を理解するための施設である。その平面的範囲は県内全域にわたり，時間的範囲は神奈川県という地域の成立の初から，現代に及ぶものであり，その基盤を構成する地質・地形は勿論，その上に生活した各時代の動植物の状態からその環境の中に人類がどのように生活したかを理解しようとするものである。

その中で我々が特に知りたいと努力していることは庶民祖先の生活の歴史である。考古部門・民俗部門は大体において庶民生活資料を扱っている。考古は地下に残されたわずかの遺物とその埋没状態から，それを残した人達の生活とその環境とその文化をさぐろうとする方法である。それは書かれたものの全くない県民祖先を研究する方法の一つである。民俗研究は現在に伝えられた生活用具を通してそれに伴う広い生活を中心に，伝承された諸行事や物語を通して祖先の生活を知ろうとするもの。それは忘られようとする近代庶民の生活なのである。民俗研究はくさらないものだけがわずかに残っている資料から，その生活を推察しようとする考古学的研究の暗示になることがしばしばある。

我々が知らされている古代・中世・近世にかけての歴史は時代の頂点に立つ人物——代表者・花形的人物・英雄といったものを中心にした物語が主であり，その生活や文化が重点になっていて，それを支えたその時代の庶民のすがたは知られにくい。時代を象徴する代表的人物の活躍状況はその時代を知るために必要であることは勿論である。しかしそれだけに終っては県民祖先のあるがままのすがたを知ることができない。その時代を支えた数多くの庶民の生活も知りたいのである。しかし庶民の生活を知る資料はほとんど伝えられていない。文献中に全然なくはない。絵巻にもみられる。男衾三郎絵巻・長谷雄雙紙・絵師草紙・福富草紙・遊行上人縁起絵・一遍聖絵・餓鬼草紙・病草紙など，現存する絵巻から庶民生活の一部をさがしだすことができる。これらの絵巻から庶民生活に関係のある部分だけをぬきだした研究書が既にある。渋沢敬三編「日本常民生活絵引」（全五巻——角川書店刊）である。用具のある生活場面をぬきだし，用具の名称をあげている。頗る便利なものであり，庶民生活を理解するに極めてよい本である。しかし絵でみてわかってもそれは結極絵でしかないのであって，ほんとにわかったのではない。できるならそれらの実物がほしいのである。特に博物館陳列資料としては是非ともほしいのである。今どきそんなものが手に入るはずがないときめてしまう前に，何とか手に入る方法はないかを考え

るべきであろう。そうした考を常に持っていれば，いつかどこかでそれが手に入らぬでもない。私はそう考えて長い間，注意をつづけてきた。鎌倉での長い勤務中に鎌倉の地下に中世の諸々の生活用具が埋没していることを知った。そして土木工事現場には必らずたちよって掘り出された土を詳細にみることにしてきた。鎌倉を去って後も，用事で鎌倉に行くたびに工事場の土に注意をつづけてきた。工事場の土にまじってどんなものが実際にでたかの例をいくつかあげることにする。それは手に入らぬと思われていた中世庶民生活を目のあたりにみることのできる資料が存在することを物語るものなのである。

○鎌倉市旧師範学校内の例

師範学校があったころ暇さえあれば校庭をみて歩いた。雨後には必らず何かが出ているからである。素焼皿（かわらけ皿）・常滑焼壺断片・青磁断片。古銭もひろえたし，櫛の破片も採集したことがある。滑石製鍋断片や菊花文をおした手あぶり断片もあった。厚さ1.5㎝くらい，1辺10㎝くらいの滑石製矩形の板半欠もひろったことがある。それは一端の中央に穴が一つあるから紐でさげたものであろう。紐ですれた穴の上部分がへっている。長さは不詳。用途も不詳。これと同じものと思われる完形品1と半欠1を，どこの工事場だったか覚えていないが，その後ひろっている。どれも似た大きさであり，一端に穴があり，紐でさげたことがわかる。今ではそれを石製の方磬（楽器）だろうと思っている。

昭和8年ころ，師範学校付属小学校小使室わきに井戸を掘ったときのことである。現地表から270㎝～300㎝に泥土層があり，泥土にまじって素焼皿（かわらけ皿）断欠・常滑焼壺断欠・木片・木箸とその断欠・半円形薄板製品・鉄片・へら状骨製品断欠・瓦片・骨片・貝殻（ハマグリ・アワビ・ダンベイキサゴ・アカニシ）などが発見された。これらは伴出の瓦片が鎌倉後期のものであることによってその時期を判定することができたが，それらは鎌倉各所で出土する庶民資料と大差ないものだった。へら状骨製品断欠は幅2㎝くらいのもので一端が直角に切ってあるコーガイ様のもの。長さは7～8㎝で折れていた。木片の中には径1㎝くらい，長さ15㎝内外の棒が数本ある。断面形は不定。削ってはあるが特に何かの形に整えたものはない。絵巻にでてくる糞棒であろうと思っている。

昭和35年，用事があって付属小学校を訪れたとき，校舎東方に積みあげられた土があるのをみて，詳細にみていたとき，素焼皿片・常滑焼片・木片・木箸断欠にまじってひどくさびた鉄片を採集した。家に帰ってから時間をかけて錆を除いたら，それは火打鉄だった。

○鎌倉市びわ小路の例

鎌倉市教育委員会が下馬付近のびわ小路にあったとき，委員会前道路でガス管埋設工事が行なわれた。掘り出された土中に庶民資料があることに気付いた社会教育課員によって常滑焼壺断欠・素焼皿・夜光貝断欠・木箸及び断欠・作業用小刀（茎半欠）が採集された。

○鎌倉市小町水道工事現場の例

小町通の水道工事現場で掘りだされた土中に素焼皿（かわらけ皿）断欠・常滑焼壺断欠木箸断片・木片などにまじって破損した和鏡があるのを通りかかって採集した。菊座鈕双

鳥梅花散文鏡（平安末期）であった。又別の場所で火打鉄の断欠や櫛断欠を採集した。先を薄く丸くした骨製へら状のものも採集した。指の先のような形で爪の部分に黒漆がぬってあり，それにつづいて数本の細い平行線がある。反対の末端近く小さい丸穴がある。琴の爪のような形である。弦楽器をひくときの爪と考えればふさわしい用途だが実際の用途はまだわからない。漆器断片も各所で採集した。黒漆塗皿の内面に数羽の鶴がとぶ図柄のものもあったし，藤の花や若松とみられる図柄もあり，岩をあらわした風景の一部もみられた。漆器断片には特に注意したからかなり採集された。

○鎌倉市稲村ケ崎土捨場の例

昭和38年から39年にかけて鎌倉市内各所に水道工事が行なわれたが，このときの土の捨場は稲村ケ崎の市営水泳場付近の山際だった。水道工事場の土中から木箸・素焼皿などがでていることを知って，土の捨場を教えられたものである。海岸道路と山裾との間のくぼ地が土捨場になっていた。38年10月，鎌倉市小町通下水道工事現場に通りあわせ，土中に素焼皿や木箸断欠・杭などの木片が出土しているのを知って土捨場に急行し，捨てられた土をかきまわして庶民生活資料を採集した。素焼皿断欠・常滑焼断欠・木片多数・貝殻（ハマグリ・キシヤゴ）などであったが，木片中に柄を失なった小形の木製鋤の完形品があった。その後11月になって再び土捨場へゆき下駄1・作業用小刀1を採集した。その後何度も出かけて土をかきまわし（表面だけだが）庶民生活資料の断片を採集した。多くの木材断欠にまじって建築遺材と思われるほぞやほぞ穴のある木材や先を尖らせた杭もみられたが，採集品中には下駄1，横長の四花形をほりこんだ矩形の木槽のほかに曲物断欠・曲物桶の底板・櫛形をした薄板の一端に小穴のある木製品（同形のもの大小数個）があるほか，どこでも出る素焼皿及びその断欠・常滑焼壺片・古瀬戸断欠・青磁片・木箸があった。特に注意して採集したのは漆器断欠で，黒漆塗の皿形や椀形のものの断欠であり，多くは木部が朽ち失なわれ漆部分だけになっていたが，朱漆で色々な絵がかいてある珍らしいものだった。

○鎌倉市由比ケ浜土捨場の例

昭和37年から38年にかけて海岸道路敷を造成中だったから鎌倉各所から土が運ばれてきていたが，水道工事・下水工事などででた土も運ばれていた。38年1月，滑川河口の東側の土捨場で下駄資料を採集しようと土をかきまわしてようやくすりへった下駄1を採集したが，このとき多くの木片の中から漆塗盆断欠・木箸及びその断欠のほか常滑焼壺断欠・青磁茶椀断欠・古銭を採集した。この漆塗盆は復元径約17.4㎝，高さ1.8㎝のもので全面を黒漆塗にしたもので，内面周約2.5㎝幅だけを丹漆塗にしたものである。

○鎌倉市二階堂小字薬師堂谷入口の例

鎌倉宮北側に自動車駐車場工事のため川道を山際へ変更する工事が行なわれた。この工事中，山裾を切りとった部分に泥岩中にほりこんだ一辺150㎝ほどの方形井戸二個が近接してあらわれた。昭和34年1月9日覚園寺住職大森順雄師が通りかかって，井戸中からほり出された土中にあった遺物を採集した。木製下駄3・木製しゃもじ1・常滑焼壺1である。ほかに素焼皿片や木箸断片があったという。

○鎌倉市浄明寺河川改修工事場の例

昭和34年11月，鎌倉市浄明寺交番前で河川改修用堀割工事が行なわれていた。掘られた断面でみると，地表下3mに青黒色粘土層が地盤を形成し，旧河道がこれを削って流れたあとが大きく不正形の弧状断面をだしていた。この河道跡には泥岩塊の丸くすりへったものが砂とともに堆積して旧河床上1m～1.5mを埋めていたが諸種の遺物はこの堆積層内に混在した。旧河床に近い10～15cmまでの間には弥生式土器片（後期，弥生町期と思われる）が粗に混在し，その上部若干の間（50cmくらい）は無遺物層となり，それより上の厚さ1mばかりの砂礫堆積層中に鎌倉期の遺物を混在した。この層には数層の断続する無遺物層があった。この層の上には更に1m余の土層を覆って現地表になっていた。ここに記さねばならぬ鎌倉期遺物包含層はこの状態から川中に流されてきたものが土砂とともに堆積したと考えられるものであり，上流に住む人達が川中にすてたものの一部と考えることができる。採集された遺物には次の如きものがある。最も多量なのは素焼皿（かわらけ皿）断欠，次に多いのは常滑焼陶片であり，次に古瀬戸陶片である。これらは日常生活に最も普通のものである。他に少量の青磁断片・白磁断片・硯断欠・古銭があった。青磁や白磁は高級品と思われるから庶民の日用品ではあるまいが，上級武士や寺などで使ったものであろう。硯は亀の彫刻のあるもの。古銭は宋銭。他に馬歯・海亀骨片その他不詳の骨片があった。

○鎌倉市上町屋の例

大船―江の島バス道の右下，天神山切通をすぎてすぐ右下方。もと土師器片散在地として知られたところの下方にある水田。三菱電機株式会社鎌倉製作所敷地工事により，ブルドーザーにて水田面をきりさげ工事中，昭和35年7月15日通り合わせて遺跡地が破壊中であることを知ったもの。水田下は土がやわらかくて入ってみることができなかったが，きり下げられた水田下の土や，水田縁辺部の土中に土器片がかなりの量みられた。このとき採集した資料は土師器片・須恵器片・木片・木製品断欠・松かさ・桃のたね・魚骨などである。土師器片は坏や壺の断片で，坏の形態から鬼高式（7世紀末）が明らかであり，又平安初期の特徴を示すものもみられた。須恵器片は所謂国分式（8世紀後半）とよばれる土師器に伴うロクロあとの凸凹が目立つ坏断欠があり，高台のあるものもみられた。墨書文字の一部が残るものもあり，少ないが貴重な資料を含んでいた。木製品断欠は25cmほどの棒状のもので断面が不正四角形，一端はやや薄く細く削られ，先が丸くしてある。他端は折れていた。ブルドーザーでふみ折られたものであろう。この遺跡は勿論生活遺跡であり，竪穴家を中心にした村落の一部であり，水辺にすてられた廃物が沼の中に残っていたものと考えられた。この部分を時間をかけて調査したらいろいろな木製品が出土したと思われる。土器片の年代からこの遺跡は7世紀末から8世紀を経て9世紀初にまで及ぶ時期のものと知られた。

○鎌倉駅地下道工事の例

一昨年だったと思う。鎌倉駅に下りたら，駅わきに地下道工事が行なわれていた。もう大半終っていたが掘り割った土層の断面に素焼皿片・常滑焼壺片・木片が出ていた。その日は工事関係者が誰もいなかったので土の捨場をきくことができなかったが，傍に残された土の山の中から古銭1と青磁断片1をひろった。素焼皿片や木箸断欠はいくつもあった

が採集しなかった。

○鎌倉市役所工事場の例

鎌倉駅裏に市役所が建った。工事中に行ってみなかったので，出土品があったかどうかはわからない。掘り出された土がまだ山積されていたのでその間を見て歩いたが，素焼皿片・常滑焼壺片・木片・木箸断片はあったが目ざす下駄は手に入らなかった。しかし青磁断片のかなり大きいものが1個採集された。割れ口が新しいのに他はない。側面に蓮弁をあらわした茶椀形のものの断欠であった。

○鎌倉英勝寺前の例

英勝寺前の道が下水道工事で掘られた。私が通りかかったときにはもう工事が終って，残土の山積があちらこちらにみられ，土中には素焼皿片・常滑焼壺片・木箸断片がみられるだけであった。

鎌倉市内は以上の例で知られるように土木工事があったところではどこでも何かしら土中から出ている。工事の初からみていれば進捗につれて多分，思わぬ出土品をみつけることができるであろう。それは鎌倉時代から室町初にかけて鎌倉に生活した人達が使ったものである。各国から集まった多くの武士がいたから，武家屋敷で使ったものもあろうし，下級武士・小者・町民といった庶民の使ったものもあったはずである。横浜国立大学付属中・小学校の鉄筋コンクリート建築が行なわれたときにも，鎌倉警察署工事のときにもおそらく地下から多くの遺物がでたと思われるが，現場をみることができなかったし，土の捨場も聞いていない。今後ますます土木工事が多くなると思うが，現場あるいは土捨場に注意することがのぞましいものである。

古代末期の県内状況を知る文献資料は極めて少ない。その時代を物語る伝世品も少ないし，諸種の遺跡も極めて少ない。そのころの県内が無人の境でなかったはずだから，生活の場所には何かしら残されていることは間違いないことである。しかし今までそれがほとんどわかっていないのはその時代の遺跡や遺物に対する研究が進まないためだったとしなければならない。大山は古代人の崇めた山である。したがって大山を中心とする地域に多くのものが残っていなければならないはずである。日向宝城坊（薬師）や飯山金剛寺（阿弥陀）や金目光明寺（観音）に平安末の仏像が残り，大山山頂・飯山白山・伊勢原比々多神社境内・愛川八菅山・愛川幣山にそのころの経塚が残っていたのはそれを物語るもの。したがって大山周辺地域に庶民生活あとが当然あるべきだと考えるがまだ発見されない。小田原市下曽我付近に千代廃寺があり，これをとりまく水田地帯から古代末期の庶民生活を物語る各種のものが発掘されたことは，酒匂川流域の古代末期を知る上にきわめて重要なことである。

○小田原市永塚の例

下曽我の永塚にある精神病院内で土取りが行なわれている現場に通り合わせたのは昭和34年3月下旬である。県教育委員会主催の千代廃寺跡調査をしたときである。周辺地域の状況をみまわっていたとき，土取現場に多くの土器片と木片が散在していた。土取場に入ってみると木片中には建築遺材もあれば木製品の断欠もあり，土器片は大部分が土師器だが須恵器も弥生式土器もあり，瓦片もあった。桃のたねをはじめ色々なたねもあった。土

取の邪魔をせぬように出土品を採集した。田舟断欠・木槽断欠・その他木製品断欠・きぬたなどもあった。土師器片は平安初期の特徴を示すものがあり，これに伴出とみられる灰釉陶片や縁釉陶片があった。つづいて6月下旬の発掘調査によって湧泉に板囲した井戸を中心とする遺跡であることがわかり，水辺の湿地に不用品を投入したところと知られた。多くの木材や木製品断欠は土器片や瓦片とともにここに投入されたものだったのである。この調査で平安初期乃至奈良後期の庶民生活跡の一部が知られ，木製品各種が採集された。把手のある木槽完形品・きぬた完形品も入手できたし，文字を刻みつけた木簡や墨書した木簡も発見された。曲物の底板断欠，しゃもじなども採集された。特に多くの桃のたねが目立った。これらは平安初期の庶民生活を物語るものだったのである。

○小田原市高田の例

千代廃寺跡のある台地の南側水田は深田である。戦後排水工事が行なわれたとき多くの木材や枝が掘りだされたがこれにまじって木製品断欠や瓦片や土師器片もでた。瓦片は千代廃寺のものと同じだった。これに気づいた高田住の内田武雄氏はできるだけ多くの資料を集めた。木製品中で特記すべきものはすりへった下駄1足である。前つぼが片よってあけられているのは古代下駄の特徴である。下駄の面には足指のあとがすりへってはっきりついていた。厚板に大きく段を刻みをつけた梯もめずらしいものだった。

県下には平安初期に特有な灰釉陶片が発見された場所が何か所かある。小田原市永塚・小田原市町畑・平塚市向原・平塚市四の宮・鎌倉市手広・横浜市港南台・横須賀市三軒家逗子市桜山などである。今後いろいろな方面から古代末遺跡の存在が知られるであろう。それはまだほとんどわかっていない古代末期の神奈川県を知る資料であり，やがて古代末期庶民祖先の生活を明らかにする糸口となるであろう。